

『神都』：近代伊勢考

ジョン・ブリーン*

序説

本報告は、近代の伊勢がいつ、どういう力学をもって、生まれてきたのかについての考察である。伊勢神宮そのものだけでなく、内宮が位置する宇治、外宮のある山田も視野に入れて、神宮およびその環境としての宇治・山田が形成される過程を追っていく。取り扱う期間は、明治元年から明治44年までとする。第1節において近代国家による神宮の流用過程に触れ、第2節は明治19年から43年まで活躍した「神苑会」という地元の組織をとりあげ、その活躍を概観し、そして第3節では近代神宮の参拝者に目を向ける。紙幅の制約があるため、第1節、第3節は大幅に省略し、第2節の神苑会を中心に論じる。

1) 近代国家による神宮流用の力学

伊勢の近代の出発点として語るべきものは、明治天皇による、明治2年3月の伊勢参宮だろう。これは日本史上初の、天皇による伊勢参宮であるため、実に画期的なイベントである。その歴史的意味合については、1) 参拝は、天皇の、内宮の祭神たる天照大神の子孫としての位置づけを明確にし、万世一系の神話を根拠づけたこと；2) 神宮も、天皇の参拝によって天皇の特権的空間に生まれ変わったこと；3) 天皇の参宮は、庶民の自由な信仰の場としての伊勢に終止符を打ったこと。

伊勢神宮の近代的空間は、この伊勢参宮を契機に生まれるものである。ここで詳細を省かざるをえないが、宇治山田からの仏教の排除、内宮外宮それぞれの世襲的神官（荒木田家、渡会家）の排除、民俗的な様子を有する前近代的祭祀の排除、そして伊勢の近世的国家的ネットワークを築いた御師の廃止が伊勢の新たな空間を作る前提となった。

2) 「神苑会」の活躍及び「神都」の確立

上述の「空間的」ともいうべき改革は、国家が上から神宮に押し付けたものである。次に検討する神苑会の活躍は、国家の改革を大きな前提としながらも、いわば「下から」新たな神宮改革を試みるものであった。明治19年から出発した神苑会の原動力は、一貫して宇治山田の実業家である。その発起人、そして中心的人物は、古市の実業家の太田小三郎であった。太田等は、何よりも先に、経済的な思惑があった。明治初年に御師が廃止され、檀家のネットワークが解体したため、参拝者が激減した、宇治山田も疲弊していた。一人でも多くの参拝者を宇治山田に呼び寄せることこそ神苑会を作った太田の目的である。

神苑会は、寄付金の中々集まらないため25年になってはじめてその計画——その一部分のみ——が実現した。注目すべき業績としては、まず内宮・外宮の接続地の確保、開拓、と整理を行い、神苑をつくったこと。神苑と同時に出来たのは、

*国際日本文化研究センター准教授

(外宮のま前に建てられた) 農業館という博物館である。この日本初の農業館の勤業的な性格がきわめて強かったことを念頭においておこう。

農業館にしても、上に触れた神苑にしても、これは、神苑会の当初の計画のごく一部に過ぎなかったのである。計画全体については、はやくも明治21年に出来た「倉田山計画見積順序」を見れば分かる。この計画は、外宮と内宮の間ぐらにある倉田山を開拓して新たな神苑とすることにあった。倉田山の神苑としての性格は実に面白い。主な施設は、歴史博物館、農工博物館、競馬場、能舞台、動物園、植物園等を収容する空間を想定していたからである。

このような計画は、非現実的で、しかも寄付金も集まらないため、倉田山の開拓が大幅に縮小された上、30年代後半を待たなければならない。倉田山へ農業館が移転したのは、明治38年。つぎに徴古館という名の歴史博物館が42年に倉田山に建った。このようにできた倉田山は、日本の博物館史上極めて特徴的な空間となった。ここでは、徴古館のみに焦点を絞り、その展示物の特徴について若干のコメントをしたい。9つの展示室を設けていた徴古館は、次のような特徴を示す。

- 1) 陳列品は、時代別に展示してあるのではなく、テーマ別の分けととなっているため、単純な歴史の語り方を避けていること。
- 2) 現在の徴古館と違って、神代、つまり万世一系などの神話について何ら展示していないし、神宮鎮座をめぐる神話的な語り方も省いている。むしろ目立つのは、仏教関係の仏像、かけぼとけ、梵鐘などの展示物であろう。
- 3) ただし、徴古館による日本史の語りは、海外交流のない歴史となっている。蘭学関係のものもなければ、幕末明治の外交の歴史など語るものもない。
徴古館の歴史の語り方は、例えば当時の教科書

にすでに姿を表している国体を中心とした日本史と大きく違うことに注目したい。この徴古館の展示がどのように展開していくのか、いつごろから例えば教科書などの神話的内容と合流するかなどについては今後の課題としたい。

神苑会は、内宮・外宮の神苑、倉田山という神苑の徴古館、農業館を残して、明治42年に解散し、土地と建物を神宮に献納した。神苑会および(朝廷をふくむ)そのスポンサーは、宇治山田を差して「神都」という言葉を頻繁に使っていたが、彼らが思い描いていた「神都」はまさにこの時に実現したのである。

3) 明治期の参拝者

伊勢神宮が参拝者に関する統計を公表するのは、明治28年以降となる。この参拝者の統計をどう解釈すればいいのかが必ずしも容易でないが、ここでとにかく注目したいことは、神都の完成と参拝者数との関係性である。徴古館と農業館が明治42年に倉田山に開館したことは、上に見た通りである。式年遷宮も行われる42年は、参拝者が確かに激増する。前年に比べて5割ぐらいの注目すべき増加である。しかしである。その翌年からまた急激に減る。神苑会の目的は、一人でも多くの参拝者を宇治山田に呼び戻すことにあったが、それがどこまで成功したか、この統計だけでは、突き止められない。

結論

伊勢神宮はいうまでもなく近代国家にとって欠かせない存在であった。まさに「帝国の大廟」で、近代日本の君主の祖先を祭る、このうえない聖なる空間である。ここでは、同時にせめぎ合いの場ともなる伊勢、神都にまで立ち入ることは出来なかった。それは今度の課題としたい。古代、中世、近世とちがって近代の伊勢は、僅かな例外を除い

て研究の対象とされてこなかった。このことは、不思議に思う。とりわけ神社会がなぜ近代の伊勢の研究をしないのか、しようしないか、という問題がある。これは、戦後の神社会の問題でもあるが、同時に明治維新以来の近代国家が流用した神宮の性格に深く係る問題でもある。